

塩尻 1 (卷一、卷二十五) 〓 天野信景

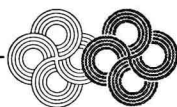
13

日本随筆大成

第三期

吉川弘文館

日本隨筆大成 第三期 第九卷
昭和五年十一月卅日發行
編纂者 日本隨筆大成編輯部
代表 早川純三郎
發行者 桜井庄吉
發行所 日本隨筆大成刊行會



日本隨筆大成

〈第三期〉13

昭和五十二年八月三十一日 印刷
昭和五十二年九月 十二日 發行

編者 日本隨筆大成編輯部

發行者 吉川圭三

發行所 株式會社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三一九一五二（代表）
振替口座東京〇一二四四番

製作 株式會社 たんちょう社

解題

塩尻 百卷

天野あまの信景きたかげ 著

本書は、神祇・国学を主とし、儒釈・政治・法制・歴史・詩文・文字・言語・天文・地誌・有職・名物・武術・工芸など百般にわたって記したもので、その分量範囲の浩瀚、内容の充実豊富なること、近世随筆中にその比を見ず、天野信景きたかげの博学多識と、その筆まめなことは真に驚くべきものがある。本書はもともと信景の坐右消閑の筆記にすぎなかったといわれるが、その後世の神道・国学の研究に与えた影響ははかりしれないものがあるが、その特に吉田神道を排し、法華を謗っているところに、信景の思想的立場を見ることが出きよう。

本書執筆の期間は、元禄年間よりはじまり、その歿年である享保十八年に至る三十余年間にわたり、全部で一千巻に近い分量があったといわれているが、今はその多くが散佚し、原書の巻数を知ることとは出来ない。今に伝わる諸本の中では、信景の歿後五十年を経て、名古屋の書肆指峰堂西村常栄が、草稿数本をもとにして編輯した百巻本が、最も量が多くまとまったものであるが、なおこれに洩れたものはなはだ多い。

書名は、伊勢物語に見える古来難解の語とされている「塩尻」の解を首巻の冒頭に掲げたところから名づけられたもので、この解は、のちに本居宣長が、その著『玉勝間』に引いて、先師賀茂真淵翁の説にまさるとしている。

本書は従来刊本がなく、明治になってはじめて『我自刊我書』に収められたが、中途にて廃刊し、又明治二十七年、名古屋で鈴木乾堂、近松矩弘校訂の『志保之利』が刊行されたが、これも遂に成らず、その後明治四十年に帝国書院より百卷本が単行された。旧大成所収本は多くこれによったのであるが、今回収録のものは、右帝国書院本の底本となった、内閣文庫蔵の百卷本をも参看した。

書肆指峰堂主人西村常栄が百卷本を編輯した際に、堀田六林に請うて書いてもらった「題白華翁塩尻後」は、大田南畝の『一話一言』に、また尾崎雅嘉の『群書一覽』に拠って知られているが、六林自筆の『護花関随筆』（国会図書館蔵）にあり、また常栄自撰の「考訂塩尻凡例」が、小寺玉晁の『連城亭随筆』第六十七冊にあり、これらによって、天野信景の略伝及び本書の成立に関する諸種の事情の知られるものがあるので、左に引いておくこととする。なお六林自筆の『護花関随筆』には、『塩尻』よりの引用をはじめ信景の談話等が散見し、三編五巻には後に紹介する「題白華翁塩尻後」の中でいっている信景自筆の塩尻草稿の一部を紹介して居り、興味ある筆記がみられるのであるが、いまはそのことまでには及ばないで他日を期することとしたい。

題白華翁塩尻後 七十二翁紀方旧

我張藩天野信景は藤内遠景七代の末裔下野守景隆後円融院永徳二壬戌、叙従五位下。の曾孫民部少輔藤原遠幹遠州秋葉城主。吉野の官軍に属し、威を近国に震ふ。三州中山天野の祖なり。より十一代の孫天野孫作信幸の男なり。曾祖父久右衛門正定、永禄四年三

州岡崎に生る。天正二年初て信康主に仕ふ神祖の命によりて、三本松を家紋とす。後に忠吉卿及び敬公に奉仕、大坂の

役に供奉す。祖父惣左衛門孝信、始は加藤左馬助嘉明に属す。後敬公に奉仕。父信幸は孝信の二

男なり。寛永元年より召出され、別に家を起す。正公御代寛文七年、町奉行を勤、禄四百五拾石

を賜ふ。貞享元年に卒。信景、幼名権三郎、後源蔵に改む。父の箕裘を嗣で、寄合に列す。中頃諸

学生国志撰の命を奉る。信景も其一人なり。此撰半にして止む。遙後に至て、宝曆中松平君山先生、命を奉りて張州府志を撰て奉らる。其中に多くは信景の草稿に拠て再選ありき。
 正徳五年御先手鉄砲頭に擢らる。名を治部と改む。享保八年病によつて職を辞し、同十五年致仕。
 剃髪信阿弥陀仏と号す。又白華翁と称す。家嫡藤左衛門英景、家督を嗣、御馬廻に列す。同十八年丑九月八日卒。行年七十五。城南性高
 院に葬。抑天野氏中興以来、御当家御譜代として、子孫厚く恩沢を蒙り、勤労怠らず、中にも此叟
 は殊に文武を兼備し、もとより螢雪に功をつみ、博聞強記古今の載籍にわたりて其淵源を採り、
 度会及尾張氏の家にたよりては、家国ののぼれる世の道をたどり、釈氏の教は顕密の窓を敲てそ
 の蘊奥を会し、老に至て浄土念仏三昧の門に入る。誠に奇才の俊傑なり。生涯風流洒落、詩歌に
 心をよせ、山水をたのしみ、其性質温厚和平、致仕の後は帯剣を投じ、麻衣草食にして、日々藜
 杖の向ふ所に任せ、身を風雲に伴ふて遊行す。一生著述の奇書、棟に充牛に汗すともいふべし。
 就中このしをじりの一部は、座右消閑の隨筆にして、凡千卷にちかし。然るに抄書に懶く、つね
 に自一行をも筆を下す事なし。文章心にうかむ時は、反古やうのうらに草稿をもふけ置て、友の
 到るを待ちて清書なさしめ、其稿はやぶり捨られしゆへ、世に真蹟まれなり。予が許に其頃自筆の稿わづか一二枚を秘蔵せり。殊勝なる手跡なり。予弱冠の頃、其函丈下に酒を載て字を問。花のあした月の夕、清談笑傲せしも、歲月流れ
 て夢のごとし。物故已に半百の忌に丁る日、性高精舎の墳塋に詣で、懐旧の涙を潑ぎ、追感の一
 章を賦す。つらつらおもふに、叟の芳名を不朽に伝まほしく、秃筆を恥ずみだりにその華冒及び
 行状を記、後世此書を見む人、此叟の隨筆なる事を疑なからしめんと、わづかに九牛の一毛をこ
 こに附するも故人を仰ぐ微志なり。惜らくは其書全部して世に伝はらず。其故は叟の生得物を惜
 む心なく、もとむる人あればここかしこわかちやりて重て乞ふ事なし。よつて三痴の怠りに原本
 多く散失せり。後の好士あまねく探り求めて、わづか其一二をも得てよかしと願ふのみ。天明二

年壬寅暮秋重陽前一夕、操筆於護花関西窓下。

とある。同じ文章が、『連城亭隨筆』にもあり、その前書には、「尾書林指峰堂本町丁目、家号伊勢常栄、彼信景先生の塩尻のちり乱れたるをかき集めしに、堀田紀方号護花関先生の序有を見しまま爰に写す」とあつて録しており、両者には小異があり、次序も異り、中でも『連城亭隨筆』所収の文には、「三痴の怠りに、原本多く散失せり。誰か是を歎かざらむや。就中書林指峰堂主人、深く此事を患へて、其草稿数本を集め、闕たるを補ひしげきをかりて、考訂塩尻百卷を自撰し云々」という一条があり、その編輯が西村常栄の手に成つたことをいっているが、堀田六林の自筆本『護花関隨筆』にはその名をあげていない。『連城亭隨筆』には、つづけて西村常栄の「考訂塩尻凡例」をあげており、これによれば編輯が西村常栄の手になることは、一層明らかである。

考訂塩尻凡例

一、此書元編輯せし書にあらざれば、所々重り書る物有。且其重る物に文辭の広略多くして、数本校合をとげざれば逸書とする事難に似たり。幸なる哉、僕が家は書を嚮をもて業としぬれば、年頃陳篇堆中に採り置しそばくの草稿をもて悉く正之、新に撰て百卷とす。猶差謬の多からんは、後の君子の訂補をまつのみ。

一、此書雅俗にわたりその益すくなからざれば、謄写たびたびに及で魚魯のわづらひのみにだもあらず。錯簡脱落往々ありて、趣意のわかちがたきものまゝ見えたり。是等の類古書に憑拠をとれるものは、悉く本書にてらして衍闕を訂すと雖も、其およばざる物は止事を得ずして旧文を存す。

一、此書卷々の次甚乱れて定る事わづらはしかりしが、所々に干支を記し玉へるを見ゐでたづき

となし、古曆に考へ合せぬれば、壹貳を録せるよりもすみやかなりしかば、則千支の傍に年号を付して、可_レ見安_二た_一よりとす。

一、此書素より草稿のみ伝ひたる物なれば、書毎に目次ある事なし。今考訂をなすに至りて、再出を除くにまとはして、又事を求めるに便りあるを以て、各巻首に目録を附す。

一、此書斯考訂をなしぬるといへども、亦再写せば誤りを生ぜむ事必然たれば、梓に上さまく欲すといへども、事公けにかかる物多くして、世に行ふ事かたきを以て止みぬ。後写せむ人、よく校合とげ玉はむ事を希ふ而已。

天明貳壬寅歲秋八月 張州吳府書林西村常榮誌。

『塩尻』に造詣深い名古屋の田辺爵氏より左の資料を得たのでここに附載することとした。氏にはここに改めてお礼を申上げる。

(北川)

「塩尻」執筆年次の推定年表

田 辺 爵

1700					年 号	百巻本の巻々	拾遺本の巻々	信 景 記 事
15	14	13	12	11				
壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅		(64) 1 3 5 (64)	(7) (9)	○九月「尾張国志」編集に加わる。36 歳か。「初学読書範」成る。
							(10) (庚辰随筆)	○「避子説」成る。 ○「中臣祓祝詞本義」成る。

1733	1730	1725	
18	17	16	15
14	13	12	11
10	9	8	
癸丑	壬子	辛亥	庚戌
			己酉
			戊申
			丁未
			丙午
			乙巳
			甲辰
			癸卯
		78	77
			76
		79	77
			75
			(92)
			(97)
	(100)	(49)	(84)
			117
			107
		(66)	112
		120	115
		129	117
註 括弧は卷順に異動のあるもの ○ 二月致仕、剃髪す。 ○ 英景御供番となる。 ○ 九月八日没。73歳といわれるが、71歳か。			
			71

目次

塩

尻（卷之一～卷之二十五）

.....
一

（解題 北川博邦 小出昌洋）

志海一里

卷之一元祿

[illegible]

伊勢祠官父子等の称

伊勢太々神楽

銀河

易経講意去疑

源頼朝生地

平信長生地

うちでのこづち

異朝古金銀銅錢掘出せし事

近衛殿下時雨てふ琴の御歌

口女といふ魚

源空日蓮が罪赦

死骸を仏家に忌

きりしたん

古本の神名帳

以三人君ニ配ニ五行之徳ニ

晦庵二人あり

熊野三所本縁

白楽天が詩、こたへの歌

伊奈突智翁の祠

尾張国分寺

江家次第書拔

非ニ其地ニ樹レ之不レ生

海中のあしかといふ獣

聖列伝

性理奥十卷

神社の四至の境

米花

鳥峯律

頂相

淡婆姑

千里鏡

候鐘

鷗裘

進ニ于神品ニ始

饗養

村里しやくしの社

賀茂葵祭

伊勢祈年祭再興

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

熱田舞樂再興	類聚神祇本源末社篇目
太神宮服忌令	鳥居
王臣以下不得供 _レ 太神宮 _一	鳥祀字也
日蝕	牛王經
田莊の古訓	三諸岳神
土岐郡古字	眞妙
東海の訓	八咫鏡
朱鳥の訓	鷗尾
多良志	支邨

毛	獅子田樂の伎
毛	河豚
兵	武嘗天神
兵	大須真福寺所藏書目
兵	日本国大廟
兵	小野小町
兵	天野民部 _{（ママ）} 太輔
兵	梅桜の論
兵	社
兵	宮号の神祠
兵	菩提流支三藏
兵	蝦夷の訓
兵	烏糸欄
兵	天地靈覚秘書
兵	神祇秘抄
兵	鹿食禁忌
兵	春秋

